

大井九条の会

大井九条の会
事務局連絡先
83-2358 二上

2月11日の定例会では

最初に憲法センターの2月号チラシで学習しました。今年の行事内容について話し合い8月行事は朗読劇、11月の発足10周年記念行事は、戦時体験集5を完成させ、その内容による話、朗読などとすることを予定いたしました。会報の配布体制についても検討しました。

次回定例会

- ・3月17日(日) 14時
- ・生涯学習センター第4会議室

我が家では、毎年正月一日に夫の親族が集まり、調理師の夫が寿司を握り、みんなに振る舞う。夫は一日しか正月休みがないため、彼は年末最後の仕事から帰って一休みした後、夜な夜な仕込みをし、親兄弟をもてなす。

今年も例年通り、握りたての寿司をたらふく食べ、賑やかな時間が一旦落ち着き、まったりしていた時である。騒がしい正月番組が突然無機質な画面に変わり、緊急地震速報が流れた。大きな揺れが起こりそうなのは、この辺りではないことはすぐ理解した。

しばらくすると、縦揺れでも、横揺れでもない気持ち悪い揺れが我が家を襲った。その気持ち悪い揺れはしばらく続いた。みんな落ち着いていたが、何が起こっているのか、テレビに注目していた。

新年の出来事に思うこと

速報が流れた。石川県志賀町で最大震度は7。正月に能登半島に大地震が襲ってきたのだ。災害に正月だろうが、平日だろうが関係ないのは分かっているが、まさか正月一日から、そんなまさかが起こるなんて思ってもみなかった。

さっきまでの楽しげなテレビは、津波が来るから高台に今すぐ逃げてーと必死なアナウンサーの声と、海岸を映す画面に変わっていた。最初こそ、被害の情報がなく、大きな地震だったけど意外と大丈夫だったのか？なんて思っていたが、時間と共に被害の深刻さがわかってきた。

私は、新潟で寮生活を送りながら、専門学校に行っている息子に安否確認のLINEを送った。彼の寮は、日本海が見える場所にある。心配だ。

しばらくすると返事が来た。今はインターンのため、こちらに来ているという。一安心し、向こうは大丈夫なのか、と聞いてみたが、情報が入って来ないからわからない、とのことだった。(のちに被害がなかったことがわかった)

私は、静岡県の函南町(かんなんみちよう)という、三島と熱海の間にある町の出身である。静岡県は、もう何十年も前から、大きな地震がくる！と云われ、私も小さな子ども頃から、いつ来るかも分からない地震に怯えて生きてきた。今でも、ちょっと揺れただけで目が覚めてしまうほどだ。



日本国憲法 第二章 戦争の放棄
第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
第二項 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

なので、未知の震度7は恐怖ではない。テレビで地震発生時の様子や、繰り返す余震の情報を見ていた時、ふと、3年前のことを思い出した。熱海の伊豆山土砂災害のことだ。盛り土が大雨で地滑りを起こし、大災害となった、あれである。

私は、両親が熱海で働いていたこともあり、地元の函南より熱海の方が親しみがあつた。伊豆山のあの景色も見慣れた景色だった。あの日、その見慣れた景色を、茶色い濁流が、ものすごい勢いで飲み込んでいったのをテレビで見て、血の気が引いた。あの辺りに、高校の同級生が住んでいるはずだ。私は慌てて彼女に安否確認のLINEを送った。既読が付くまで、気が気ではなかったが、しばらくすると既読が付き、返事がきた。家が土砂に押し流される直前に娘と2人脱出し、近くのホテルに避難してきた、とのことだった。私は、「生きてた！良かった！」と力が抜けた。彼女の夫と息子は出かけており、無事だった。

自分の身近で、このような災害があるたび、安否が分かるまで、不安と心配で苦しくなる。これが家族や親族などの身内であつたなら、どんなに辛いであろうかと思う。

今回の地震や、羽田での飛行機衝突事故、そして今も続く戦争…。助かった命、救われた命、失われた命、奪われた命…そしてなげない日常。その儚さや、有り難み。改めて考えさせられた。

能登半島地震では、まだ不明者や不慣れた避難生活を送る方がたくさんいる。その方々が一日も早く日常を取り戻せるよう願うとともに、自らもいつか来るその日のために備えねば、と思う。

そして、この原稿を考えていた去る2月1日、大井九条の会の先輩である風間さんが逝去された。闘病中だったことも知らなかった私は、しばらくその知らせを信じることが出来なかった。風間さんとは同じ自治会におり、ついこの間、自治会の祭りであつたばかりだった。面倒見の良い人であつた。

「平和への思いを語る会」の朗読劇では、戦争の中に身を置かねばならぬ主人公の無念さに、感極まり涙した風間さん。平和への熱い思いは、人一倍強かつたのではないだろうか。

風間さんの在りし日の姿を偲び、ご冥福をお祈りするとともに、風間さんが願っていたであろう、平和で、誰もが命を脅かされることのない世界を、私たちは作り、守っていかなければならない。

山崎もも子